



巻 頭 言

変えない勇気

尾 上 守 夫*

わが国のオプトエレクトロニクス産業は 92 年には 1 兆 3 千億円に達している。その半分は光ディスクであるが、ほとんどは CD であって一般ユーザーに支えられた娯楽市場の巨大さがわかる。CD は 1982 年発売後急速に立上って、6 年後には LP を抜き、1990 年にはテープを加えたオーディオソフト全体の中でも数量、金額ともにシェア 90% を越えている。それに対してコンピューター用の光ディスクは数々のバラ色の予想があったにもかかわらず立上りは遅々としている。その理由はいろいろ考えられるが、一つユーザーの視点に立って言いたいのは、あまり頻繁に改良しないほしいということである。

コンピューターの世界には対数直線的進歩という思考パターンがある。DRAM がその例で、横軸に年を、縦軸に対数で集積度をとると直線になる。その他にも CPU の能力、価格など同様の関係を示すものがたくさんある。各メーカーはこれに則って開発目標を設定し、また事実達成している。その意味でこの思考パターンは技術開発の一つの原動力である。対数直線的進歩に支えられてコンピューターシステムは数年ごとに更新されるようになってきた。したがって内蔵されるチップは次々と新しい開発結果をとりこんでいって差支えない。

コンピューター用の光ディスクの開発についても、直径、回転速度、記録密度などに関して同様のパターンがみられる。光ディスクの用途は大別して、ハードディスクやフロッピーの代替として比較的短期の記録で済むものと、アーカイブ的な長期記録を必要とするものに分けられる。前者はチップと同じく新しい開発結果を次々におりこんで変えていってもよい。しかし後者については長期にわたってむしろ変えないことが大事だと思う。ユーザーにとって入れ物よりは中味の情報がずっと大事だからである。猫の目のように変るドライブや媒体に長期間保存を必要とする大事な情報を託するユーザーは少ないであろう。

折しも CD-ROM ドライブ付のパソコンが急成長し、また厚生省は医用情報の電子記録を公的に認める通達を出した。コンピューター用光ディスクにとって追風である。それを活かすためにはアーカイブ的用途に対してはドライブもディスクも軽々に変えない勇気が必要である。